



TITLE:

中國史上におけるインフレーションに就いて

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. 中國史上におけるインフレーションに就いて. 經濟論叢
1949, 64(1-3): 25-44

ISSUE DATE:

1949-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/132175>

RIGHT:

京都大學經濟學會
經濟論叢

第六十四卷 第一・二・三號

京都大學經濟學部創立三十周年

記念論文集

第一集

- 預金通貨概念の問題……………中 谷 實
- 中國史上におけるインフレーションに就いて……穗 積 文 雄
- 獨占資本主義と外國市場……………松 井 清
- 國有鐵道に於ける資本と勞働……………島 恭 彦
- 社會政策の理論と「階級闘争」……………岸 本 英 太 郎

昭和二十四年九月

中國史上におけるインフレーションに就いて

穂 積 文 雄

中國史上における貨幣の中心はなんといつても錢と鈔（紙幣）である。だから、中國史上におけるインフレーションに就いての考察はこの二者に就いてなされねばならないであろう。しかるに、インフレーションは、普通、紙幣、とくに不換紙幣においてなりたつものと考へられる。そうだとすると、錢においてインフレーションはなりたぬことになり、したがつて、錢についてインフレーションを考察するということは意味のないことでなければならぬ。だが、インフレーションは、はたして、不換紙幣においてのみなりたち、鑄貨においてはなりたぬものであるうか。おもうに、インフレーションは、通貨の流通量が増大して、財貨の存在量との均衡が破綻し、その結果、貨幣價值の下落すなはち物價の騰貴を生ずる現象であろう。それは、なるほど、不換紙幣においてなりたつが普通であろう。だが、それにしても、たとえば、金銀が非常に巨大な量において出現する場合、金銀貨において、かかる現象が見られぬものであらうか。もちろん、この場合、金銀の供給増大の結果、その價值が低落し、金銀の價值低落の結果、金銀貨の價值が低落するのである、だから、貨幣價值の下落は貨幣素材の價值の下落に起因するの

であつて、貨幣數量の増大に起因するのではない、だから、それはインフレーションではない、といえるかも知れない。しかしながら、そういうとき、それは、貨幣價值の説明において素材説 (Soffentheorie) に立脚している。そして、素材説は商品説 (Wareneheorie) のカテゴリーに屬する。しかるに商品説においてながめられるとき貨幣は物品貨幣の性格を拂拭してをらぬとせねばならないであらう。かくて、いま、それにおいて物品貨幣の性格を見うるとすれば、金銀の量數の増大は、やがて、貨幣數量の増大にほかならぬと考えられよう。すくなくとも造幣特權 (Münzreg.) の確立せざる以前においてはそう考えることが實際に應ずるものであり、また、近世、造幣特權の確立せる後においても、自由鑄造の制度が採用されるかぎり、かく考えることは實際と背離しないといへよう。こう考へてくると、インフレーションはかならずしも紙幣とくに不換紙幣においてのみなりたつ現象ではなく、いはゆる鑄貨においてもなりたちうることをみとめてさしつかえないであらう。しかしながら、なりたちうる、といふことは一つのことであり、なりたつ、ということとは他のことである。では、中國史上、錢においてインフレーションがなりたつを見ることが出来るか。そして、できるとすれば、それはいかになりたつか。

二

錢は方孔、圓形のいはゆるあなき錢で、その素材からみればときに鐵を主とする鐵錢が行はれたこともあるが、まづ原則としては銅を主とする銅錢が行はれたものである。しかるに銅錢は、その素材たる銅の產出量の制約、その器具への使用、ならびに、錢そのものの國外への流出等によつて、その流通量の不足になやむこと、むしろ、普通のやうで、インフレーションどころか、逆に、デフレーションにおちいることめづらしからず、錢の缺乏

を荒年における五穀の缺乏にたとえて、「錢荒」ということはさうまれたくらいである。⁽¹⁾ からは、錢においてはインフレーションは見られぬかといえは、かならずしもそうでもない。では、いかなるところにそれが見られるか。われわれはそれがまづ私鑄を媒介としてあらはれるのを見るであろう。

錢におけるインフレーションが私鑄を媒介としてあらはれるということは一見奇怪なことに感ぜられよう。たしかに、それは奇怪な現象にちがいない。しかし、それはすこしもめづらしいことではなく、中國においては、たえずくりかえし生起するところの、むしろ、普通の現象である。元來、私鑄がインフレーションの原因として奇怪に感ぜられるのは、私鑄が、違法であり、私鑄貨は贗造貨であり、例外的存在であり、その流通量は大でない、というよりも、むしろ、微々いうにたりないところに屬し、したがつて、それは、とても、通貨の價値を低落せしめ、財貨の價値を騰貴せしめるほどの力をもつに足りぬからである。もちろん、私鑄が違法でなく、私鑄貨が贗造貨でない場合もある。しかし、その場合は、國家が通貨の發行を私人に委託するか、免許する場合であつて、そこでは、政府の監督の眼がひかつてをり、發行者も重大な責任を負はされてをり、結局、國家自身通貨を發行する場合と實質的にはあまりちがいはないわけで、インフレーションをひきおこすことからはかえつて縁が遠いといつてよからう。そして、中國においても、この後の場合の私鑄が見られぬわけではない。たとえば、前漢において、吳王・鼻や、大夫・鄧通が山に即いて貨を鑄たがごとき、また、くだつては、隋の高祖が、「晉王・廣の楊州に五鑪を立てて錢を鑄るをゆるし」、⁽²⁾「漢王・諒の并州に五鑪を立てて錢を鑄るをゆるし」⁽³⁾せるがごとき、また、唐の高祖が秦王・齊王に三鑪を、右僕射・裴寂に一鑪を、⁽⁴⁾たまひ、もつて錢を鑄るをゆるせるがごときが、それである。そして、これ

らの場合には、べつに、それがインフレーションをひきおこすにいたつたという記述は見ないようである。もつとも、吳王・鼻や大夫・鄧通の場合については、「漢志」に「このとき、吳は諸侯をもつて、山に即いて錢を鑄る、富、天子にひとし、後ついに叛逆す、鄧通は大夫なり、鑄錢をもつて、財、王者にすぐ、故に吳・鄧の錢天下に布く」とあり、これによつてこれをみれば、彼等が多額の錢を鑄造したことはうかがえる。しかしながら、それがインフレーションをひきおこすまでにいたつたことはいはれてをらない。もちろん、そうでない場合もないわけではない。それにしても、かかる私鑄そのものが元來例外的な現象である。(後述の史實参照)

だが、ここで問題とする私鑄は、むしろ、まえの場合の方である。すなわち、違法行爲であり、贋造貨幣の場合である。ところが、この私鑄が、中國においては、いつの代にも見られる、普通の現象に屬している。明の丘濬は中國の貨幣史を論じて、「錢の弊、僞にあり、」と喝破しているが、まことに至言と思う。それほどこの意味の私鑄は中國貨幣史上においては普通の現象である。したがつて、中國における貨幣史上の問題を理解するためにはこの意味の私鑄を理解せねばならぬといつても、けつしていいすぎにならぬであらう。それはともかく、中國貨幣史上にはこの私鑄がさかんに行はれるを見る。いかにそれがさかんに行われるかは、もと中國においては、貨幣の發行權は君主のもつばらとすべきところであるとの論が、はやくよりとなえられ、また、制度においても確立せられているところであるにもかかはらず、いつも、私鑄があつたとをたえず、その根絶がほとんど不可能で、それ故に、むしろ、私鑄禁止の令をのぞくにいたつた例さえあるによつても、これをうかがうことができよう。しかも、その私鑄貨が流通するのである。そこで、通貨の數量ははなはだ大きなものとなる。それがいかに大きなものであるかは、さきにもふれたるがごとく、中國史上においては、元來、錢荒なる現象がめづらしくなく、したがつて、これ

が救済のために、いろいろな策が考究せられるわけであるが、その一として私鑄容認策が提議され、實行されるを見ることさである⁽⁷⁾。ことによつてもこれを知ることができよう。かく、私鑄がさかに行われ、貨貨が流通し、その結果、貨幣の流通量がきわめて大となるとすれば、そこに通貨の流通量はなほ大きく増大して財貨の存在量との均衡が破綻し、その結果、貨幣價值が低落し、物價が騰貴し、いうところのインフレーションなる現象が出現するにいたることがあるとしても、それはかならずしも奇怪なる現象ではないことを知らねばならぬこととなる。

いま、これを、史實について見れば、たとえば、「史記」の「平準書」に、有司が「郡國多くは姦して錢を鑄、錢多くして輕し」と見え、「宋書」の「顧竣傳」にも、「景和元年、沈慶之、私鑄を啓通し、これより、錢貨亂敗し、一千錢、長さ三寸にみたず、大小これにかなう、これを鸛眼錢という、これよりおとるもの、これを繩環錢という、水に入りて沈まず、手にしたがつて破碎す、市井また數をはからず、十万錢、一掬にみたず、斗米、一万、商貨行はれず」とあり、「魏書」の「食貨志」には、「自後行うところの錢、民、多く私鑄し、稍、小薄に就き、價用いよいよ賤し、建義の初、盜鑄の禁を重くし、糾賞の格を開く」とあり、「隋書」「食貨志」には、梁の世、「ことごとく銅錢をやめ、あらためて鐵錢を鑄」たところ、「鐵賤くして得やすきをもつて、ならびにみな私鑄し、大同已後におよんでは、所在の鐵錢つひに丘山のごとく、物價騰貴し、交易は車をもつて錢をのせ、また數を計らず、ただ貫を論ずるのみ」と記し、また隋においても、「大業已後、王綱弛紊し、巨姦大猾、ついに多く私鑄し、錢うたた薄惡、はじめ千ごとなお重さ二斤なりしも、後ようやく輕く、一斤にいたり、あるいは鐵鑄を剪り、皮を裁ち、紙を糊し、もつて錢となし、相雜えてこれを用い、貨賤しく物貴く、もつて亡ぶにいたる」とあり、「宋

史・食貨志」にも、「民間盜鑄するもの多く、錢文大に亂れ、物價翔騰し」とあり、「金史・食貨志」には、銅錢でなくて銀貨ではあるが、つぎの記述を見る。「承安寶貨を私鑄するもの、多くは雜ふるに銅錫をもつてし、ようやく行ふことあたはず、京師、肆を閉づ」とあるを見ることが出来る。同様な記述はさらに「明史・食貨志」においても、「清史稿・食貨志」においても、また、見出すにぐるしまぬところであるが、あまりにわづらはしければ、いま、一々あげず、以上の例により、私鑄を媒介として錢においてインフレーションの生起する事情は、ほぼこれを理解することが出来るであらう。

しかしながら、以上の例における、貨幣價值の下落、物價の騰貴は、かならずしも、通貨の數量の増大の結果ではなくして、むしろ、貨幣の素質の劣惡化の結果ではないかという疑問がおこりうるであらう。なるほど、通貨の數量が増大していることはあきらかにみとめられる。だが、品質の劣惡化せることも同様にあきらかにみとめざるを得ない。そうすれば、貨幣價值の下落の因をただちにその數量に歸するわけにはいかぬことにならねばならぬ。いはんや、上例においては、品質の劣惡化が貨幣價值の下落の因であると解することの方がむしろ、自然であり、すなほであるようにすら感ぜられるにおいて、なほさらである。しかも、ひるがえつておもうに、貨幣は、もと、交換の媒介者、流通の手段である。もし、これが不足をつげるときは、いはゆるデフレーションにおちいり、通貨價值は騰貴し、物價は下落するはずであらう。そして、そのことは、貨幣の素材價值がほとんどネグリスブルな不換紙幣の場合においてもなほかつそうでなければならぬはずである。そうだとすれば、たとえ私鑄とはいへ、それが流通し、その流通により通貨の數量が増大せることがあきらかにみとめられる以上、そのことが貨幣價值の下

落に影響をおよぼさぬとどうしていえるか。さらに、もし、通貨の數量が増大しているのでなければ、物價がそのように騰貴し得るはずがなく、かりにそのように物價が騰貴するとすれば、流通手段たる貨幣の不足をきたし流通の杜絶をさへ結果せぬとはかぎらぬことになるであらう。もちろん、上例の史實には流通の杜絶を結果せるをおもはしむるものがしばしばみられる。しかし、インフレーションが極端に達すれば流通が混亂におちいるのはむしろ普通のことであること、いうまでもないところであらう。また、こうもいえる。すなわち、インフレーションにおいては、通貨の數量が増大し、その結果、貨幣價值が下落し、物價が騰貴する、しかし、それはかならずしも人が通貨の數量の増大を意識するが故に生ずるとはいえぬであらう。さすれば、いま上例の場合、貨幣價值の下落、物價の騰貴において人が錢貨の低下に眩惑せられて通貨の數量の増大をネグレクトしているとしても、その故に、通貨の數量の増大が貨幣價值下落、物價騰貴の因であり、そこにインフレーションを見ることが否定せられねばならぬ理由はあり得ないであらう、と。いわんや、「錢多くして輕し」とか、「鐵錢つひに丘山のごとく、物價騰貴し云々」とかいうふうに、通貨數量の増大が貨幣價值の下落、物價騰貴の因であることをもかならずしもみとめざるにあらざるもののあるにおいてなおさらしかりであるといえよう。それにしても、私鑄を通じてあらわれる錢のインフレーションにおいては、それが錢貨の劣悪化によりて拍車づけられるということはこれをみとめてよい、いな、みとめなければならぬことは、いうまでもないところとせねばならぬ。

つぎに、われわれは、錢におけるインフレーションが大錢を媒介としてなりたつを見ることができよう。中國に

おいて大錢なるものは、これ、また、けつして、めづらしいものではない。むしろ普通のものである。げんに、錢という字が史上はじめて見えるのは「國語」においてであるといわれるが、それは周の景王が大錢を鑄たという記事である。もとより、この記事が史實としてはたして眞なりや否やは疑問とせられるところである。いな、今日においてはおもしろ否定せられるに近いようである。かりに、これが事實であるとしても、それは、「錢の輕きをうれて、まさにあらためて大錢を鑄んとす」るものであり、錢價下落の救済策にほかならぬはずであるから、およそ、インフレーションを媒介することとは對蹠のものでなければならぬ。ここにいう大錢は——そして、それこそ、まさに、中國において大錢という場合普通のものであり、さきに、中國において大錢なるものは、けつしてめづらしいものではないといったところのものであるが——一箇にて小錢二箇以上の價值を與えられたる錢である。そして、それには、たとえば、明の太祖が鑄た洪武通寶において、大小五等の式により「當十錢、重一兩、餘は遞降し、重一錢にいたりて止む」とあるがごとく、大錢小錢の素材價值がその名目價值に比例するものもあるが、かくのごときは、むしろ、まれであつて、大錢小錢ならび行はれる場合には、その素材價值の比はその名目價值のそれと比例せず、大錢はその比例をこえてはるかに高い名目價值を享有するが普通である。たとえば、宋代にあつて、「小銅錢三にして當十大銅錢一を鑄るべし」（宋史・食貨志）とあるがごときが、すなわち、それである。かかる大錢の鑄造はやがて通貨流通量を増大せしむる所以であり、錢荒救済策の一でもありうるが、同時に、それ故に、また、それは、インフレーションをひきおこす所以でもありうるものでなければならぬであらう。

いま、これを史實に徴して見れば「晉書・食貨志」に、「孫權、嘉平五年、大錢一、五百に當たるを鑄、赤烏元

年、また、千錢に當たるを鑄る、故に呂蒙荊州を定め、孫權、錢、一億をたまふ、錢すでに貴く、ただ空名あるのみ、人間これをうれふ」とあり、「舊唐書・食貨志」をみると、「乾封元年、封嶽の後に至り、また、新錢をあらためつくる、文に曰く、乾封泉寶、徑一寸重二銖六分、すなわち、舊錢とならび行う、新錢一文を舊錢の十に當つ、周年の後、舊錢ならびに廢す、（中略）また、改鑄により、商賈通ぜず、米帛價を増す、」とあり、また、「御史中丞、第五琦奏請す、錢をあらため、一をもつて、十に當たるの錢を鑄るをゆるし、文を乾元重寶と曰ふべし、（中略）また、さらに、重輪乾元錢を鑄、一を、五十に當て、二十斤にして、貫をなさんことを請ふ、詔してこれを可とす、ここにおいて、新錢・乾元・開元通寶錢、三品、ならびに行う、ついで、穀價騰貴し、米、斗、七千にいたり、餓死するもの、道に相枕す」とあり、また、「宋史・食貨志」に、「大約、小銅錢三、當十大銅錢一を鑄るべし、故に民間盜鑄する者多し、錢文大に亂れ、物價翔騰す、公私これを患ふ」とある。明、清時代に入つても大錢はやはりというよりも、むしろ、ますます行はれ、當百・當千等さえあらわれ、貨幣價值の變動をひきおこすにいたつてゐるを見ることがでる。

かくのごとく、われわれは大錢を媒介として錢においてインフレーションのなりたつを見る。しかし、この場合注意せねばならぬことがある。それは、この大錢においてなりたつインフレーションにおいて私鑄が、やはり、大きなはたらきをしていることが見られるということである。すくなくとも、それは私鑄によつて促進せしめられるというべきであることである。おもうに、大錢は、たとえば、「小銅錢三にして當十大銅錢一を鑄る」がごときもので、素材價值をはるかにこえた名目價值をもつものである。それだけに、それは、私鑄の好對象でなければなら

ぬ。さらでだに私鑄のさかんなるところにおいてこれが私鑄のさかんなるべきは推測にかたからぬところといえよう。そしてそのかぎり、また、大錢においてなりたつインフレーションは、ひとり、錢の數量の増加のみならず、錢の品質の下落に起因するところあること、看過するをゆるさぬものがあることをわすれてはならない。そして、錢質の下落といえは、大錢は、それ自體錢質の下落にほかならないのであるから、たとえ、私鑄を通じなくとも、また、數量の増加を考慮に入れなくとも、なお、貨幣價值の下落の可能性をみとめなければならぬとも考えられる。すなわち、名目價值の實質價值への接近とでもいうべき事象においてなりたつ大錢價值の下落である。宋代の當十大錢が、結局、當三錢になつていゝがごときはこの理を説明してあまりあるものといえよう。そしてそれが單にそれだけにとどまるならば、大錢の價值の低落にすぎず、一般に錢價が低落し、物價が騰貴することにはかならずしもならないであらう。それはしかしながら、大錢が通貨の數量を増大せしむることによりて貨幣價值の下落、物價の騰貴を誘引することもまたいふべからざることは、かならずしも多言を要しないところであらう。そしてそのかぎり、われわれは、大錢においてインフレーションがなりたつものを見ることのできるであらう。

なお、大錢それ自體における素材價值の低下は、これを、兌換券における部分的な兌換の停止に擬することができるとはあるまいか。そしてそれができるならば、われわれは、大錢におけるインフレーションにおいて、部分的な不換紙幣におけるインフレーションの理を見ることができないかと思うが、いかがなものであらうか。

ちなみに、今日、インフレーションの下においては巨額の名目價值をあたえられたる貨幣が出現することがめづらしくない。前大戰後のインフレーション時代、ドイツにおいては、それまで中央銀行の銀行券一枚の金額は一千

マルクを限度としたが、それが、一万マルク、十万マルク、百万マルクとなり、一九二三年十一月には遂に一兆マルク、二兆マルク、三兆マルクに飛躍した。今次大戦後のインフレーション下のハンガリーでは十兆兆ペンゴ札が出現した。わが國でも以前は百圓札は日常生活にはあまり縁がなかつたといつてよいと思うが、今日のインフレーションの下ではかつての十圓札ほどに——あるいはそれ以上に——流通している。千圓札の發行すら要望の聲をきくくらいである。これら大紙幣は大錢と共通するものをもつといえようかと思う。しかし、これらの大紙幣はインフレーションの結果としてあらわれる產物であり、大錢はインフレーションをひきおこす因子である點においてはまったく對蹠的であることはみおとすべからざるところといはねばならぬであらう。ただし、そうはいうものの、インフレーションの進行過程においては、因が果となり果が因となる。通貨の數量が増大するから通價の價值が下落し、通貨の價值が下落すればまた通貨の數量が増大せざるを得ぬことになり、はてしなく循環するところにインフレーションは進む。したがつて、大紙幣はインフレーションの結果であり、大錢はインフレーションの原因であるといつてみても、インフレ行進曲の奏吹裡におどるこの二者のこの區別はかならずしもなしうべからざる場合もありうるとせねばならぬであらう。

さきに述べたごとく、錢は方孔圓形のあな、錢であつて、普通このあなに糸をとおして用いられる。これを貫という。あるいは綬ともいう。一貫は普通千文よりなり、百文ごとにふしでくぎりがつけられる。しかるに、この場合、百文に足らざるものをもつて百とすることが行はれたものである。これを「省陌」または「墊陌」等とよ

び、これに對して百文が缺けてをらぬものを「足陌」とが「足錢」とかよぶ。あるいは、また、「省陌」は貫の長さからこれを「短錢」といい、これに對して「足陌」を「長錢」ということもある。もつとも長短は相對的な概念であるからひとしく「省陌」の中でも長短の區別が生じうる。たとえば九十をもつて百とする「省陌」を八十をもつて百とする省陌に對して長錢とよぶがごとくである。ところで、「省陌」は百に足りない錢をもつて百とするのであるから、それは三錢をもつて十錢にあたらしむると同じ理でなければならぬ。したがつて、「省陌」は大錢と、すくなくとも、通貨の流通量に對する關係においては同様の事情にあると見ることができる。しかるに、大錢は、上述のごとく、その媒介において錢についてインフレーションをなりたしむる。しからは省陌もまたその媒介において錢についてインフレーションをなりたしめることが推定せられるところであらなければならぬといえよう。しかし、史實に徴すると、省陌の記述は、古くよりはじまり、枚舉にいとまのないほど見られること私鑄や大錢と同様であるが、いま、それらの記述を見るに、それがインフレーションを形成せしむるにいたつたということを認承せしむるに足るものを見かけない。普通、正史の上ではじめてあらはれるとせられるのは、さきに引いた、「隋書・食貨志」に見ゆる、梁の代「所在の鐵錢丘山のごとく、物價騰貴し、交易は車をもつて錢を載せ、また數を計らず」とあるにひきつづいて、「商旅姦詐し、これによりて利を求め、破嶺より以東、八十をもつて百となし、名づけて東錢といい、江・鄧以上七十を百となし、名づけて西錢といい、京師九十をもつて百となし、名づけて長錢という、中大同元年、天子すなわち詔して足陌を通用せしむ、詔降りて、人従はず、錢陌ますますすくなし、末年にいたり、ついに三十五をもつて百となすという」とある記述であるが、そしてこれが、まず、省陌とインフレーションとの關係が、もつとも深い記述といつてよからうと思うところのものであるが、これにおいても、

省陌は、むしろインフレーションの結果であつて、その原因ではないといわねばならない。しかし、史實の記述に徴證するに足るべきものがないといつても、それが大錢と理を同うし、そして、大錢がインフレーションの媒劑であることをみとむるかぎり、それがまた、インフレーションの媒劑たることを一概に拒否するのはいかがなものであるうか。いはんや、史實の記述に徴證するに足るべきものを見ぬといつても、それはもと、淺學寡聞の私のせまい涉獵の範圍内でのことにすぎぬのである。案外徴證するに足る記述がでて來まいものでもないと思われるにおいて、なおさらである。

さらに、省陌がインフレーションの媒劑となるというとき、その中にふくまれる箇々の錢に私鑄貨があることは別とするも、その省陌の數を勝手に變更することにおいて、私鑄と同一の理を見ることが、見おとしてはならぬであらう。

三

錢においてなりたつインフレーションにあつては、通貨價值の下落・物價の騰貴は通貨の數量の増大によるとしても、なお、通貨の品質の劣惡化によるところあるをみとめねばならない。二者の區別は理念の上では容易であるが、現象の上では困難である。それだけに現象において見るときは、錢においてあらはれるインフレーションはインフレーションとしては純粹なものとはいえない。そして、それは、結局は、錢が素材價值をもつことに歸せられるであらう。ところが、紙幣は素材價值をもたない。すくなくとも、ネグリシブルである。だから、紙幣においては、純粹なインフレーションがなりたちうると考えられる。ただし、兌換券は別である。兌換券も、紙幣であるが

きり、それ自體の素材價值はネグリシブルである。しかし、それは一定の鑄貨の表象である。故にそれはその鑄貨の素材價值を反映する。そのかぎりにおいて、それはその鑄貨となんらえらぶところはない。その素材價值がネグリシブルになるのは、兌換が不能または停止となつて、不換紙幣と化する場合である。ところが、中國の紙幣は、もと、兌換券である。それが、濫發の結果不換紙幣と化するが常である。明の丘濬が、「鈔（紙幣）の弊、多にあり¹⁰⁾」といつたのも、もつともである。そこで、われわれは中國の紙幣においては絶えず純粹にちかいインフレーションを見ることとなる。故に、いま、これを史實に徴せんとすれば、應接にいとまあらず、枚舉の煩に堪えない。だから、ここには、しばらく、その代表的なものの若干を引くにとどめる。

中國の紙幣は宋の交紙にはじまるといはれるが、その交子について、すでに、「宋史・食貨志」は、「交子、給多くして、錢足らず、價はなはだ賤きをいたす、すでにして實錢なし、法、行うべからず」としるしている。「金史・食貨志」を見ると、河東宣撫使・胥鼎が上言して、「今十貫例のもの、民間はなはだ多し、もつて歸するところなし、故に、市易多く見錢を用い、鈔、每貫わづかに直一錢、かつて工墨の費に及ばず」といい、平章・高琪の奏に、「軍興りて以來、用度賁らず、ただ寶券に頼る、然れども、入るところ、出つるところを數かず、ことをもつて、漫く輕く、今、千錢の券、僅に、直、數錢、隨つて造れば隨つて盡き、工物、日に増し、もつてこれを救う有らず、弊ますますはなはだしからん」とあるを見る。なお、「新元史・食貨志」には、耶律楚材が紙幣の濫發をいましめて、「金の章宗のとき、はじめ交鈔を行い、錢と通行せしむ、有司、鈔を出すを利となし、鈔を收むるを諱となし、これを老鈔という、萬貫をもつてしてただ一餅に易ふるのみにいたる、民力困竭し、國用匱乏す、まさ

に監戒となすべし云々」といえるを引く、「元史・食貨志」にも、「行鈔を印造し、民間に通用せしむ、これを行ふこといまだ久しからずして、物價騰踊し、價十倍を逾ゆ、また、海内の大亂に値い、軍儲供給賞賜犒勞、毎日印造し、數計すべからず、舟車裝運、舳艫相接し、交料の人間に散滿するもの、これ無きところなく、昏軟せるものは復行用すべからず、京師、料鈔十錠、斗粟に易ふる、得べからず、すでにして、所在郡縣、みな物貨をもつて相貿易し、公私積むところの鈔、ついにども行われず、人のこれを見ること弊楮のごとく、國用これによりてついにとぼし」とあり、「明史・食貨志」には、「大明寶鈔をして歷代の錢と兼ね行はしむ、……時に江西閩廣、民、錢を重んじ鈔を輕んず、錢百六十文をもつて鈔一貫に折するものあり、これによりて、物價翔貴し、錢法ますます壞れて行はれず」とあり、また、都御史・陳瑛の言として「比歲、鈔法通ぜず、みな朝廷鈔を出すことはなはだ多く、收斂法なく、もつて物重く、鈔輕きによる、」とある

これによつて、紙幣においてなりたつインフレーションが、その濫發の結果、その價值が下落し、物價騰貴し、やがて破局に進むことにおいてあらはれるのがあきらかに看取できよう。ただし、その際、貨幣價值の下落は兌換不能におちいるのが原因であることをみとめねばならないようである。しかるに兌換中止は紙幣の質的變化であり、量的變化ではない、といわねばならないであろう。そして、それはそうである。そのとおりである。いなむべくもないところである。しかしながら、兌換の不能は濫發の結果である。そこで、やはり紙幣價值の下落の因を數量の増大においてみとめてよいといえることにはならないものであらうか。それに、かりに兌換が停止されても、もし數量さえ適當であればかならずしも價值の下落をきたすものでないことは不換紙幣制度の存在がこれを證す

る。かういうと過去の中國において不換紙幣が制度として、はたして、なりたちうるものであるかどうかが問題となるでもあらう。しかし、流通經濟の下においては流通手段たる貨幣を必要とすることは疑問の餘地のないところで、すでに、流通手段たる貨幣が不可缺であるとすれば、それが單なる紙片にすぎなくても、かまわぬはずであり、そして、そのことは中國のみを例外とせねばならぬ理はないであらう。それは、南北朝時代、すでに、東晉の孔琳之が、「聖王無用の貨を制して、もつて有用の財を通ず、(中略)穀帛は實となし、もと衣食に充つ、分かちてもつて貨となせば損を致すことはなはだ多く、また商販の手に勞毀し、割裁の用に耗棄す、これが弊たるや曩よりもいぢるし」(晉書・食貨志)と論じているによりても知られよう。けだし、それは、通貨の素材として有用の財を充てるは不經濟である、よろしく無用の財をもつてこれに充てよというものである。だから、これをさらに徹底すれば不換紙幣制度の肯定論となるべき理である。そして、元朝においては鈔を發行しながらその表示する錢はこれを發行するにいたらなかつた例もある。⁽¹¹⁾すくなくとも、さきに私鑄のところで述べたように、貨幣の品質がその價值の下落の因をなすことをみとめるとしても、なお、その數量の増大がその價值の下落の因であることをみとめることはゆるされ得よう。さらに、インフレーションをその進行形においてながめれば、兌換不能の結果紙幣の價值が下落すれば、當然の結果として、より多くの紙幣を増發すべき必要にせまられねばならず、そして、その結果、その貨幣價值はさらに下落し、かかる循環の結果、ついに破局にいたるわけであるが、いまかかる兌換停止後の紙幣増發によるその貨幣價值の下落は品質の劣惡化に因るのではなくて、數量の増大に因るものであることはいふまでもないところとせねばならぬであらう。

つぎに、紙幣におけるインフレーションにおいては、さきの錢におけるその場合とおもむきをことにし、その數量の増大が私幣に因るという現象が見られない。すくなくとも右の例にはあらわれてをらない。これはただ右の例にあらわれていないのみではなくて、ほとんど見られぬところといつてもよい。それでは紙幣においては私幣はおこらぬのかといえは、そんなものではない。いうまでもなく、私幣のおこる原因としてまず第一にあげらるべきものは利を得るということであろう。しかるに、私幣はその金額が大であり、その素材は安價である。利を得るといえばこれほどあつらえむきのあるものはない。まるで、濡れ手で粟のつかみ取りみたいなものである。だから錢において私幣がおこるぐらゐなら、紙幣においてこそ私幣がおこらねばならぬと考えられる。げんに、歴代、これに對する對策にすこぶる苦心せる跡がうかがえる。これに對する制裁は常に嚴格をきわめ、紙幣の表面にさえそれをあらわしているくらいである。また、實際にもその事例はある。そして、それは、けつして、めずらしくはない。たとえば、宋の淳祐三年臣僚が奏して、「いま、官印の數、損すといえども、しかも偽造の券いよいよ増す、しばらく、十五・十六界の會子をもつていはば、その入るところの數、よろしく出づるところの數より減すべし、いま收換の際、元額すでに溢れて、來たるものいまだ止まず、もし偽造するにあらずんば、それ何ぞよく多きをしたすことかくのごとくならん」(宋史・食貨志)といつてゐる。それほどあるのに、右の例にもみるごとく、紙幣におけるインフレーションにおける因としてこの私鈔が指摘せられていない。それは一體どうしたことなのであるか。清朝時代における紙幣論者である王鑒等にいわせると、紙幣は錢などちがつて詳細な印刷であるから偽造が困難であるとか、紙幣は金額が大で各人が注意するからごまかしが利きにくいとかいうことになるようであるが、どうもそれだけではなつとくしかねるのはひとり私のみではあるまい。それではそれは何故であろうか。それにつ

いて、こうは考えられぬであろうか。すなわち、錢はすでに述べたごとく不足になやみがちであつた。そこで、私幣はその不足を充足する役割をはたすことになる。そこで、それが流通する。それに素材價值がある。もちろん、利のためにする私幣であるから品質は悪い。しかし、ともかく素材價值はある。品質が悪いからやがてその價值は低落するが、それでもなお悪かろう安かろうで低い價值で流通しよう。とにかく、かくて、それは流通する。ところが、紙幣は素材價值をもたない。紙幣としてよりのほかに使えない。しかるに、これはその素材は豊富である。だから政府はいくらでも發行できる。不足どころか、いつも過剰に發行してインフレーションにおちいるを常とすること上述のごとくである。過剰はあつても不足はない。これでは私幣の流通する餘地はないといわねばならない。いくら利が得られるといつても、それは流通を前提としてのことである。流通の餘地がなければ利のあげようはあるまい。かくて、最初に述べたごとく、それは例外的な存在でしかなくなる。とてもインフレーションを引きおこす因子にあげられるほどにはなり得ないことになる。私はこう考えるのであるが、はたしてどんなものであらうか。さらに、かりに、私鈔が少々その數を増したとしても、政府の濫發の前にはほとんど問題にならず、あだかも太陽の前の星のごとくその影がうすいこともまた指摘するに足りようか。

四

以上、私は中國史上におけるインフレーションについて若干の考察をこころみるところあつた。それにおいて、私は中國史上においてインフレーションは錢においても紙幣においてもあらわれしることを見た。そして、錢においてあらわれるインフレーションは、私鑄、大錢を媒劑とすること大であり、また省陌も大錢と同様の作用をな

すと考えられることをあきらかにするとともに、大錢においてもなお私鑄が大きな作用をなしてをり、省陌においては私鑄と性格をひとしくするところの作用が存することを知つた。要するに、錢においてあらわれるインフレーションにおいては私鑄という因子がきわめて大であり、そしてそこにそのインフレーションの特異性が見られることになるであらう。そしてこの特異性は單に通貨の數量を増加せしむること以外、その品質の低下ということによつて貨幣價值の低下、物價の騰貴に拍車をかけるという重大な意味をとまなうことに留意せしむるものである。ところが、紙幣においてあらわれるインフレーションは、これとおもむきをことにし、ほとんど、政府の濫發によりておこり、その發生、發展の過程は大體、今日のインフレーションとカテゴリーをひとしくするを見る。それではそれには、べつに特異性と見るべきものはないかといへば、私はかならずしもそうもいへぬのではないかと思ふ。けだし、紙幣にインフレーションがつきものであるといふ觀を呈してゐること、いひかへれば、それが例外的な現象といふよりも、むしろ、原則的な現象といふべきに似るものあることは、その特異性としてあげるに足り、またあげねばならぬと思はれるからである。いかに、それが、そうあるかは、清朝時代に入つてさへ、その初期においては、なほ、その弊をおそれるのあまり、紙幣の發行を忌避する傾向があり、それを建言した者を、「妄言政を亂す者」として戒めてゐるによつても、これをうかがひえよう。

そしてこう見てくるとき、明の丘濬の「錢の弊、偽にあり、鈔の弊、多にあり」の句をいまさらながら、至言と感ぜざるを得ぬ。

なほ、こゝで、インフレーション對策がいかに行はれてきたかについても考察すべきであるが、それについて

は、以前に書いたもの、中ですでにふれたことがあるので、それにゆづることとする。⁽¹⁴⁾

——一九四九・八・二——

- (1) 「比年。公私上下。並苦之錢。而百貨不通。人情窘迫。謂之錢荒。」(「宋史・食貨志」)
- (2) 史記・平準書、漢書・食貨志。
- (3) 隋書・食貨志。
- (4) 舊唐書・食貨志。
- (5) 丘濬、「大學衍義補」、卷二十七。
- (6) 加藤繁博士「西漢前期の貨幣特に四銖錢に就いて」(「山下先生還曆記念東洋史論文集」所收)
- (7) 拙著、「支那貨幣考」一一九—一二一頁、參照。
- (8) 加藤繁博士「周景王鑄錢說駁批判」(「史學」第十一卷、第二號)
- (9) 拙著、「支那貨幣考」一八二—一八五頁參照。
- (10) (5)を見よ。
- (11) 「元之交鈔寶鈔。雖皆以錢爲文。而錢則弗之鑄也。」(「元史・食貨志」)
- (12) 玉璽「錢幣芻言」、拙稿「玉璽の紙幣論」(「經濟論叢」第五九卷、第二・三號)參照。
- (13) 劉錦藻。「皇朝續文獻通考」卷二十五
- (14) 拙著、「支那貨幣考」一七一—一七二頁、一〇八一—二〇頁、一九一—一九六頁參照。